

小田原市板橋地区におけるまちづくり地域資源「なりわい」の変遷に関する考察

正会員 ○池田 聖子*1 同 北沢 猛*2
同 初田 香成*3 同 渡邊 高章*4

なりわい 地域資源 まちづくり
中心市街地活性化

1 研究の背景・目的・方法

我が国における都市の再生、特に地方都市において、その特色ある地域資源を活かす手法が各地でおこなわれつつある。この時、特色ある資源とは、歴史的建造物や町並みというハード面だけでなく、人的資源やなりわいという、ソフト面の資源も含まれると考えられる。

本研究の目的は、江戸時代中期以降から製造業が盛んになり、現在もその面影を残す小田原市板橋地区を事例に、地域資源である産業（以下、なりわいとする）を活かしたまちづくりのあり方を明らかにすることである。

主な研究の方法としては、以下の2つである。

- ①住宅地図帳¹を用いてなりわいの変遷状況を地理的に把握し、町並みの変化との関係を明らかにする
- ②「板橋地区まちづくりアンケート」（2002.12実施）による居住者の業種変遷に関する回答から、なりわいの変化の様子を明らかにする

2 小田原市板橋地区の現状

小田原市板橋地区は、小田原駅から小田原城のある城山をはさんだ西側に位置し、面積は約10.8ha、人口3,882人（平成14年6月1日現在）のまちである。その歴史は古く、既に北条氏世下では「大窪」と呼ばれ小田原城下の延長と



図1 板橋地区の位置

して職人町を形成していた。主な居住者は北条早雲の庇護のもと、関東全域から選りすぐられた職人達で天守閣建設などに従事していたという。

一方で、板橋には室町時代以前に建立された、由緒ある寺社仏閣が現在も存在しており、旧東海道（地藏尊通り）沿いの町並みや、日本最古の公共用水と言われる「小田原用水」、明治期以降の「別邸建築」など歴史的資源が多く残されているのも特徴の一つである。

近年は、このような歴史を持つ建造物や産業が減少傾向にあるが、平成13年に策定された「小田原市中心市街地活性化基本計画」では、板橋地区を「伝統の街並み形成ゾーン」として位置づけ、小田原駅周辺から板橋地区

へと観光客が回遊するアーバンツーリズムを担う地区として、小田原市活性化の一端を担う存在として期待されている。

3 板橋地区におけるなりわいの変遷

3-1 戦前までのなりわい

板橋地区は古くから、産業として農業だけでなく、街道沿いのまちとして様々ななりわいが盛んであった。例えば1885年の板橋地区のなりわいは、農業の他、清酒・醤油・水油製造各1、漆器商1、質屋1、穀物商5、水車米搗商28、酒類小売商1、飲食店5、理髪床2、大工3、鍛冶3、塗師5、木挽3、茅屋葺4、板屋根葺3、理髪職1、荷車引15、人力車夫11、駕籠6という数字があげられており²、木工関係の職人と、水車を用いた搗米、運送夫が多かったことが伺える。その他、江戸時代以前から続くなりわいは、染め物商・はきもの商・茶屋・造園業などがあげられる。

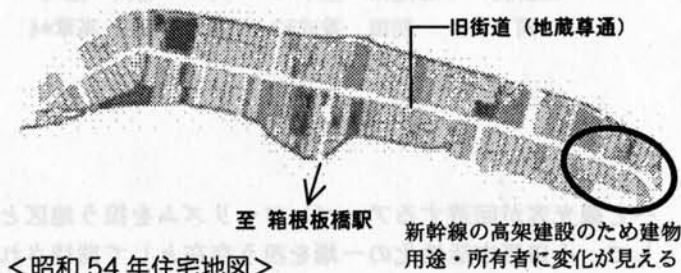
また大正時代でも職人、特に大工が多く、大工の親方と、その弟子や関連の職人（鳶職、畳屋、建具屋、ブリキ屋、左官屋、経師屋）が下職として近くに住み、協力していた。小田原用水を利用した水車を使った米屋や木地屋も多く、また箱根物産関係の職人も板橋にまどまって仕事をしていた。この時期、板橋の職人文化に活気があったのは、箱根との関係、さらには別邸（益田孝、山県有朋、大倉喜八郎、松永安左衛門など）の存在により、出入りする職人の技術が高まったと言われている³。

3-2 住宅地図帳にみる町並み変遷（図2）

職人文化に活気のあった板橋であったが、昭和に入ると次第にその職人の数は減少する。そこで、その変化が顕著であると考えられる戦後から現在までの期間に着目し、住宅地図帳の情報を元に当時のなりわいと町並みの変化を探ると、以下の5点について明らかになった。

- ①サービス・飲食店より物品や食品の製造・販売が多い
- ②板橋に以前あったような伝統工芸品（木工/染め/表具など）を扱うところは減少し、住宅になりつつある。
- ③近年は低未利用地が増加傾向にある。一度低未利用地になると住宅や店舗・事業所にはなりにくく、駐車場・集合住宅に変わる例が多い。
- ④旧街道の中央部（特に南側）は、なりわいと居住者のいずれもほとんど変化がない。

<昭和34年住宅地図>



<昭和54年住宅地図>



<平成10年住宅地図>

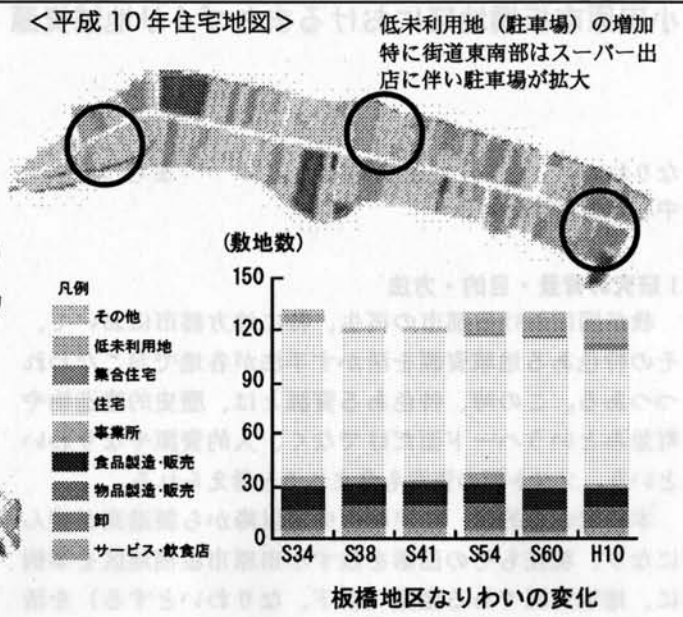
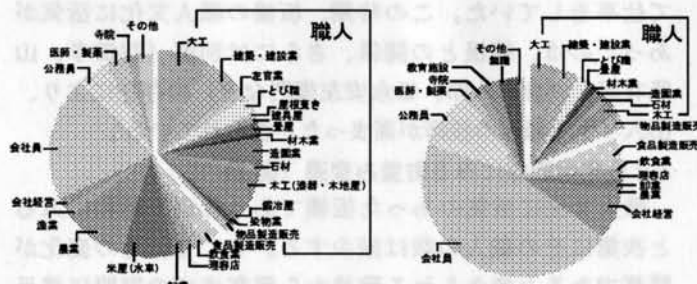


図2 板橋地区におけるなりわいと町並みの変化

⑤旧街道の東西の端部分は建物用途や建物所有者の入れ代わりが中央部に比較的多い

3-3 なりわいの変化—まちづくりアンケートによる

様々な外的要因により、土地利用だけでなく板橋地区居住者のなりわいも変化し、町並みに変化を与えてきたことが住宅地図帳から明らかになった。そこでさらに具体的ななりわいの変化を探るため、2002年12月に行った「板橋まちづくりアンケート」の中で「なりわいの変遷」を地区内居住者に具体的に回答していただいた。本アンケートは自治会を通じ548世帯に用紙を配布、有効回答数は170件(有効回答率31.0%)であった。



居住開始時の職業 (無回答65名は除く) 現在の職業 (無回答65名は除く)

図3 なりわいの変化の様子

主な回答の結果をまとめると以下の5点である。

- ①居住開始時の業種(職種)は会社員・公務員が最も多く、次いで大工・左官など建設業が36件、米穀業(水車含む)が9件と続く。
- ②特に戦前からの居住開始者に、大工・造園・左官・建具屋・畳屋など住宅の建築や維持管理に関する業種が多い。

③小田原用水の水流を活用した水車による米穀業(9件)や、木地屋2件など、板橋独特の業種がある。

④時代を追うごとに会社員や公務員が増加し、かつては職人の多かった板橋も、会社員の世帯主をもつ家族がその大半を占めるようになっていく。

⑤会社員や公務員が入居した場合、世代交代しても自営業、特に製造業に携わる人はおらず、さらに居住開始当初は製造・販売業を営んでいても、一度店舗をたたむと、世代交代後であっても店舗を再開する人はほとんどない。

4 まとめ—なりわいの課題とこれから

旧街道には物品やサービスを「販売する」店舗より「製造」し「販売する」製販一体型店舗が多いのが板橋地区商業者の特徴と考えられる。しかし板橋の特徴的ななりわいであった、箱根物産の製造や住宅建築関連の職人は、産業構造そのものの変化や、別邸文化の衰退、居住者自身の高齢化等により維持が困難になり、商売をたたんだり、業種を変化させたりし、現在に至っていると考えられる。

板橋地区の地域資源である「なりわい」の維持ができないと、一般住宅や集合住宅、さらに空き地や駐車場など低未利用地が増加し、ソフト面の資源だけでなく、町並みの維持も困難になっている。板橋地区固有の「なりわい文化」を維持するには、現存するモノ・技術・人という資源を継承する仕組みが必要なのである。

【参考文献】

- 1 「ゼンリン住宅地図」昭和34、38、41、54、60年、平成10年
- 2 「小田原地方商工業史：昭和20年まで」(1989)内田哲夫・岩崎宗純著
- 3 「聞き語り おだわらふるさとの記憶」(1997)小田原市

*1 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程
 *2 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 助教授
 *3 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 博士課程
 *4 株式会社UG 都市建築

*1 Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
 *2 Associate Prof., Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
 *3 Graduate School, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
 *4 UG Toshi Kenchiku